

2006年4月16日イースター礼拝「死を治める王」

今日はイースター、復活節の礼拝です。今年もこの復活節の朝を、こうして皆さんと共に、喜びを持って迎えることができますことを本当に感謝しています。復活節は、墓から甦られたキリストの復活を記念する日です。それは教会にとってクリスマスよりも大切な日です。今日はまだキリストを自分の救い主として受け入れてない方もいらっしゃると思いますが、是非覚えていただきたい、教会にとって一番大切な日はこのイースターです。というのは、キリストが復活されたということが、私たちの信仰の一番の土台のところを支える希望になっているから。キリストが確かに十字架にかかって死んだ、これは誰もが認める歴史的事実です。しかしそうして死んで墓に葬られた後に、その死をくぐりぬけて甦られた。これは初めて聞く人にとっては、何を馬鹿げたことをと言いたくなることかもしれませんが、でもそのことをも歴史的事実として受け入れて、そこにこそ希望を見出しているのがキリスト教会の人たちなのです。その希望はどのようなものかというと、この復活のキリストを信じるなら死んでも生きるというものです。ヨハネ 11:26 を開いてください。今日の朝、子どもたちと一緒にイースター礼拝をしましたが、そこで暗誦聖句にしたのがこの御言葉です。このように、死んで甦られたキリストを信じるなら、死の力に打ち勝たれた方であるキリストを信じるなら、私たちもまた死んでも生きる。キリストと同じような栄光の体が与えられて、永遠の命の喜びが与えられる。そういう復活の希望に生きるのがキリスト者です。この希望があるから、私たちにとって死は最後ではないのです。死は悲しみで終わるのではないのです。死は、復活の希望の入り口なのです。そしてこの希望に生きはじめるとき、その人のうちに新しいいのちが生まれるのです。この希望の内に新しく甦るといってもいいかもしれませんが、この希望がすべての人のために与えられた日、それがキリストの復活の日です。2000年前のこの日です。というわけで前置きが長くなってしまいましたが、今日はそういう喜びの日なのだということを是非覚えていただきたいと思いました。そして今日はこのような復活節を記念するために、先週に引き続いて詩篇 22 篇をご一緒に読みたいと思います。

先週私たちはこの詩篇 22 篇を読んで、十字架の上でのキリストの叫びに思いを馳せました。この詩篇は、その冒頭の「我が神、我が神・・・」という叫びを、主イエスが十字架の上で叫んだということで有名な、主の受難を預言している詩篇として読まれてきた詩篇ですが、読むだけでもお分かりのように、非常に重苦しい、祈り手の深い苦しみを書き綴ったような嘆きの詩篇でありました。この詩の中で祈り手は、神が遠いと、繰り返し嘆きます。2 節。私がどれだけうめいても、私の救いは遠いのだという嘆きです。だから祈る、12 節、そして 20 節。そして彼は、できることならば決して口にしたいくないようなおぞましい言葉を、次々と口にせざるを得ない、それほどまでに追い詰められていることが分かります。例えば 7 節。私は人間ではないと言う。人間ではないような扱いを受け続けてきた人の言葉です。あるいは 15 節。こ

れももともと、心臓が蝸のようになって内臓の中で溶け出すというグロテスクな表現ですが、それほどまでに、体がグダグダになるほどの無力感を味わっている。そして 16 節。心も体も焼きつくように渴いてしまって、恐ろしい言葉を口にせざるを得なくなる。私は神によって死に打ち捨てられたのだと、希望から最も遠く離れた言葉を口にせざるを得ない、祈り手の魂の状況が想像されるのでした。

こういう詩篇 22 篇の嘆きの中に、苦しみの中の苦しみが示されていると私たちは考えた。それはこの世の誰も経験したことがない苦しみ。どれだけ深い苦しみの中にある者でも、この詩篇と共に嘆くことができるように、ここには究極の苦しみが書かれている。神から遠く離れてしまって、完全な孤独の中で、絶望しきって死んでいく人の、もはや人間の言葉にはならない獣のようなうめき声が書かれていると、いうことができると思います。そしてそのような叫びを、主が十字架の上で叫ばれたということ、もう一度再確認しようとしたのでした。主イエスは、十字架の上でこの詩篇 22 篇の叫びを叫ばざるを得なかった。それは主イエスが、この詩篇 22 篇に綴られた苦しみの中の苦しみを味わいつくされたということです。キリストの十字架の上での叫びは、この詩篇 22 篇を本当に自分のものとして嘆いた、ただ一人の方の、獣のような叫びだったのです。そのようにして主は、あの十字架への道において、この詩篇に描かれた苦しみの中の苦しみを味わいつくされ、それを成就された。そのことを改めて教えられたわけです。詩篇 22 篇はそのようなキリストの受難の苦しみを、すべて見ていたような詩篇である。その意味で、まことに受難週にふさわしい詩篇であります。

しかし私たちが今日覚えたいのは、この詩篇はまたイースターにもまことにふさわしい詩篇であるということです。この詩篇が見ていたのは、キリストの受難だけではない、苦しみだけではない。なぜならこの詩篇は、嘆きだけで終わっていないからです。深い嘆きの中から、突然沸き起こるようにして、喜びと勝利に満ちた賛美の言葉が生まれてくるのです。この変化に今日は共に驚きたいと思いました。嘆きから賛美へという一大転換です。

このような動きというのは、22 篇だけでなく、詩篇全体に通じているものでもあります。詩篇というのは、神を信じて生きる人間の心のありようを、あからさまに描き出しているものです。それは神の胸倉をつかんで訴えざるを得ないような深い絶望の極みと、神によって救いと平和を与えられて、心はしゃいで躍りだしてしまうような希望の極みの、その両極を行きかう中で生まれてきた、非常に生々しい祈りなんです。決して模範的な聖人君子の祈りが並んでいるわけではない、いつも心穏やかな清い人の祈りではない、神の前に自分の弱さも身勝手さもすべてをさらけだして、時に嘆いて、時にほめたたえる、そういう二つの極を行きかっている、私たちのとても不安定な現実、信仰を持っていながらも動揺を繰り返す、そういう現実即した祈りが詩篇には並んでいるのです。そしてそういう詩篇の祈りの中では、いつも一大転換が起こっている。死の淵から、暗闇の底から、もう一方の極に向かって、あらんかぎりの声を上げて叫ぶ時に、何事かが起こり、詩人を賛美へと向かわせる。詩篇においては、魂の苦悶の果

てに、自分の世界に閉じこもってしまうような、そういう動きはないのです。その苦悶の果てに、絶望の底から、その自分を取り囲む深い闇を突き破って、差し込んでくる光を求めて、新しい命が開かれることを求めて、神に叫ぶのです。無駄にも思えるようなその叫びに賭ける。そこで何かが起こるのです。

この 22 篇においても、そういう一大転換が起こっています。それは 22 節から分かります。ここにある「わたしに教えてください」という言葉、これは非常に難しい個所で、何通りもの翻訳が可能なのですが、私はここを「わたしに教えてください」という風にしたいのです。これは別に私が勝手に言っていることではなくて、何人もの註解者が言っていることですが、ここは「ついに神がわたしの祈りに教えてください」と、そういう言葉として理解すべき。それは神から遠く離れたところから、嘆いて叫んで、声にならないうめきをうめき続けてきた詩人に与えられた、神からの答えです。何事かが起こったのです。暗闇に光が差したのです。祈りが聞かれた、それが転換を生み出す。23 節以下の賛美の言葉を導く。

そして私たちはここに、キリストの復活を読み取ることができると思う。この詩篇に綴られた嘆きを本当に嘆いたただ一人の方が、同じようにただ一人だけ経験なされた、死の底からの甦り、絶望の底からの甦り、その復活の出来事を、この詩篇は見つめているのだと思う。それは苦しみの頂点において、まったく思いがけないところで起こった一大転換です。絶望から希望への転換です。キリストが経験された完全な絶望が、希望の中に呑み込まれていった、そういう瞬間でありました。キリストの十字架での最後は、苦しみの中の苦しみを通られて、完全な孤独の中で死に打ち捨てられたように見えた最後でした。しかしその絶望の淵からあらんかぎりの声で叫ばれた、「我が神よ」というあの叫びに、神は確かにお答えになって、彼を墓穴から連れ戻される。そこに死の力をも治められる、神の力が確かに示されて、キリストを絶望から引き上げたのです。その復活の出来事による希望への転換が、ここで預言されているということが出来るのです。

そしてそれは、キリストにとっての転換であっただけではなく、キリストを信じるすべての者たちにとっても、絶望が希望に変わった大きな転換点でありました。キリストが十字架の上で死んだ時、彼を救い主だと信じた者たちは誰もが絶望しました。それは希望が消えた時でした。ケネディ大統領が暗殺された時、その時代の若者たちは深い絶望を味わったと聞いたことがあります。その時代を必ず正しい方向へと導き、平和を実現してくれると、皆が希望をもって見つめていたリーダーが、闇の力に葬り去られた、その絶望は想像してあまりあるものがあります。そのような絶望は、人間の歴史の中で何度も繰り返されてきたのだと思います。でもキリストの死において起こったのは、それらの絶望の一つ一つを超えてなお深い、完全な絶望です。滅びへの路を行く人々を救いへと招くために、神が送ってくださった救い主が、人間によって捕らえられ、死の力、悪の力にあらがうことができずに無残に殺されていく。その十字架の下に集った者は、みなそこにキリストの敗北を見たのです。私たちの救い主が、死の力に

よって屈辱的に葬り去られてしまった、命を与える力は、命を奪う力に叶わなかった、その絶望を覚えたのです。私たちは神に見捨てられた、神はこの人から遠く離れてしまった、私たちから遠く離れてしまった、もう希望は無い、誰もがそう思った。

でもその絶望は、希望への入り口であった。神は私たちの救い主を見捨ててはいなかった。それが分かったのが、キリストが復活されたあの 2000 年前の朝でありました。新約聖書によりますと、その朝女たちは、イエスの遺体に香油を塗って整えて、イエスと最後のお別れをするために墓に訪れたとあります。誰も期待していなかったのです。イエスが甦るなどとは、誰も期待していない、それは悲しみの朝だったのです。でもそのような人々に、神の御使いたちが、神からのメッセージを告げるのです。「キリストはここにはいない、復活したのだ」それは、人を殺す力に対して、人を生かす神の力が決定的に勝利したことを告げる、神の勝利宣言です。それによって私たちは、神の力が届かない場所は、この世界にどこにもないということを知ったのです。たとえそれが死の力の支配する絶望の淵であっても、そこにも神の愛は届いている、命を与える神の力は届いている、そのことを私たちは知ったのです。

これは本当に私たちの人生を根本のところ支えている希望なのです。この希望がなければ、私たちは苦しみを前にして絶望するしかない、死を前にして絶望するしかない。皆さんそれぞれに多くの苦しみを抱えておられると思います。その苦しみの一つ一つに、私は昨日この説教を準備しながら思いを馳せていたのでありますけれど、その中で特に、二ヶ月前私たちが天に送った野村満寿江姉妹の闘病の様子を思い出していました。満寿江さんは本当に長く病と戦ってこられました。とても気丈で明るい方でしたから、そんなそぶりは普段見せることがなかったのですが、でも病院に見舞いに尋ねる中で幾度か目にした苦しみのご様子は、本当に痛々しくてお辛そうでありました。陽子姉妹から、もう病院から出ることはできないかもしれないと聞いていましたが、私はそれを信じたくなくて、できるだけ長く満寿江さんとお話をしていくと懸命に祈っていましたが、でもやはり最後は病に勝つことができず、息を引き取っていかれました。その満寿江さんの闘病生活と死という事実を思う時に、もし主の復活が無かったならば、何の希望もそこには無いということ、私は改めて強く思わされたものでした。

本当に苦しんで苦しんで、最後は死の力に抗うことができず死んでいかれた姉妹です。でも私たちは、あの苦しみの中の苦しみを味わいつくされた主イエスを、絶望の中の絶望を味わいつくされた主イエスを、墓の中から呼び起こした、神の命の力を知っている、だから、そこにも希望を見出すことができるのです。人の目に終りにしか見えない死の時さえも、永遠の命の始まりの時に変えてしまう神の力を私たちは知った、キリストの復活において私たちは知った。ここに私たちの希望が在るのです。私たちの喜びがあるのです。

だからこの復活の喜びを、皆で喜び賛美せよとこの詩篇は呼びかける。23 - 24 節。そして確信の言葉を続ける、25 節。これはキリストの復活によって明らかにされた、人を生かす神の力に対する信頼の言葉です。主に従う貧しい者たちにはいかなる苦しみが臨んだとしても、それは

神がその人たちを見捨てたということではない、そして神が悪しき力に抗うことができないということでもない。神は必ずその叫びを聞いておられる。そして死の力をも支配される、その大いなる力をもって、必ずイキイキとした命を与えてくださる。この確信に基づいて、この詩篇は私たちに、神を賛美せよと促すのです。

そしてこの詩篇は、さらなる先を見つめています。この死に打ち勝たれる主のもとに、すべての人々が集い、神を賛美し礼拝する、その神の国の広がりを見つめています。28 - 30。キリストを死から甦らせた、その神の救いのみわざと、大いなる命の力による御支配を、すべての人が認めて、悔い改めて、御許に立ち返る時がくるであろう。そして死をも治めるこの主なる神こそ、全世界の民を支配する王権をもつ方である。この地に住むものはことごとく集う、そして塵に降った者、つまり死者たちまでも集って、主を賛美するという、そういうあらゆる領域に及ぶ、神の御支配が歌われる。そしてその広がりには空間的な広がりだけでなく、時間的なものでもある。31 - 32 節。命を与えられた私から、未来に向かって、子孫へ、次の代へと、神の成し遂げてくださった救いの御業が語り継がれる、キリストの復活という出来事が、死の力に対する命の力の勝利が語り継がれ、賛美が続いていく。未来へ向かって。そのような果てしない広がりを持った、神の国の幻がここで歌われている。キリストの復活に始まる、命の力の勝利の歌声が、果てしなく広がっていく大きな幻を、この詩篇は私たちに見せてくれるのです。

私たちはまだ、この幻の完全な実現を見てはいません。でもこのイースターの日、世界中の教会で、この教会と同じようにキリストの復活の喜びが歌われ、死の力に対する神の力の勝利が語り継がれているというその事実を思う時に、この詩篇 22 篇の幻が確実に成就に向かっていく、その喜びを思います。そして 2000 年前のこの日、弟子たちが復活のキリストと再会したあの歓喜の時から、主の復活を祝う歌声は途切れることなく続いて、この日の礼拝まで続いてきました。この賛美の声はこれからも続くでしょう。再びキリストがこの世界に来られるその日まで、死を治める王に対する賛美は、いつまでも続くはずで、私たちも大きな声を挙げて、主の復活を賛美したいと思います。そして更なる未来へ向けて、この福音を語りついで行きたいと思えます。